

「新学生サービスセンター」建設へ

西宮上ヶ原

工事跡地で起工式

28年7月竣工予定

関西学院大学は4月17日、西宮上ヶ原キャンパスに新たに建設する「新学生サービスセンター（仮称）」の起工式を現地で行い、施設の詳細を明らかにした。施設は、昨

年から解体工事を進めていた旧学生サービスセンターと旧第2教授研究館跡地に建設され、2028年7月末の竣工、同年9月の供用開始を予定している。



新学生サービスセンター（仮称）の景観イメージ（学生会館側）＝関西学院広報部提供

大学は、施設が新たな学生交流の場となることを目指す。森康俊学長は起工式で「全学の学生、教職員が集い、交

流し、活気あふれる新たな居場所づくりに取り組んでいきたい」と語った。

起工式の最後には、森学長ら5人がくわ入れを行った。「えい」という掛け声とともに盛砂を崩し、工事の安全を祈った。

（高尾亮典・八島みのり）

関西大 OG スピードスケート

長森遥南さん



6面

人間福祉学部

池埜聡教授



4面



入学式で式辞を話す森学長＝2026年4月1日、総合体育館、田爪翔撮影

関西学院大学の2026年度春学期入学式が4月1

日と2日、西宮上ヶ原キャンパス総合体育館で行われ

「AIにできない学びを関学大で」 新生5699人が入学

5699人の新生が関学大に入学した。

式辞に立つた森康俊学長は、大学の役割として教育・研究に並ぶ「社会貢献」の重要性に言及した。高度に情報化された現代社会において、知識を体系化することは人工知能（AI）が担ってくれるが、自ら現場に足を運び、他者と対話し学ぶことが学びの本質であることを述べた。

また、中道基夫院長は17世紀の哲学者デカルトの言葉「我思ふ、故に我あり（コギト・エルゴ・スム）」を引用。生成AIが瞬時に「正解らしきもの」を提示する時代に対し、「便利さに思考を明け渡すことなく、自ら疑い、判断をする主体性が不可欠だ」と指摘した。

学長と院長とともに、AIに言及した上で主体的な学びの重要性を説く式辞と祝辞となった。

学内では今年も、スマホやカメラを構える保証人や真新しいスーツに身を包んだ新生の姿があった。

入学した経済学部1年の男子学生は大学で頑張りたいこととして「将来の夢の銀行員になるために簿記やファイナンス、プランナーなどの資格を取りたい」と勉強への意欲をのぞかせた。

国際学部1年の女子学生は「留学が関学の大学の中で特に強いから留学をしたい」と長期留学をして学びたい」と笑顔で夢を話した。（田爪翔

ホロ

村田沙耶香さんによる小説『コンビニ人間』は、読者に「普通」とはなにかを問いかける。主人公の古倉恵子は彼女なし36歳、コンビニで18年間働いている。恵子は「コンビニ二店員」でいるときだけ、世界の正常な部品として生きていることを実感する。しかし、彼女は新入り男性店員・白羽と関わる過程で、理解者だと思っていた家族や友人ですら、自分が「普通」になることを求めているというところに気づき、ショックを受ける。そして恵子は18年間働いたコンビニを辞めた。「コンビニ二店員」でなくなった恵子は活力を失ってしまふ。しかし、白羽に強引に連れ出された恵子は、乱雑で慌ただしいコンビニを見つめる。そこでコンビニバイトこそが自分の生きる意味だったことに気づき、もう一度「コンビニ二店員」に戻ること、晴れ晴れと決意したのだ。恵子は周囲からの「普通」の押し付けに悩みながらも、最終的に自分はコンビニのために存在していることを確信した。この小説は、自分自身があるまま

ホロ

この自分を受け入れ、信じてくれることの大切さを教えてくれる。『心の貧しい人々は、幸いである。天の国はその人たちのものである』これは新約聖書マタイによる福音書に登場するイエスキリストの言葉だ。『心の貧しい人』とは自分の弱さや限界を受け入れることができる人のことだといわれている。▼新学期、慣れない環境で新たな出会いが続くだろう。社会から浮かないよう、本来の自分を隠して「普通」を演じ、苦しさを抱える人は少なくないのではないだろうか。現代社会に生きにくさを抱える人が、少しでも飾らずに生きていけることを祈る。

計 36 団体が KSC に集結し、新入生へ魅力を発信 主催者「KSC の強みは横のつながり」



ポスターとスタンプシートを見せる学生コーディネーターのおふたり＝4月23日、神戸三田キャンパス、小林颯翔撮影

関西学院大学ヒューマン・サービス支援室は神戸三田キャンパス第二厚生棟で、4月22・23日の二日間、合計36団体が参加するボランティアEXPOを開催した。

ボランティアEXPOは主に新入生を対象にボランティアの興味関心を周知することを目的とし、各参加ボランティア団体が会場内に小間を設置し、傾聴者を募る方式で開催された。

主催を務めるヒューマン・サービス支援室ボランティアコーディネーターの沖本祐基さん(27)は、西宮上ヶ原キャンパスでのボランティアEXPOとの違いについて「三田はボランティア団体同士のつながりが強く横断的で、それをふまえて毎年イベントの改善も意欲的にしている」と述べた。

神戸三田キャンパスでのボランティアEXPOでは今年度、各小間をまわることでスタンプがもらえ、4つ集めることで景品をもらえる企画が行われた。各参加ボランティア団体の学生が作成した景品がランダムで獲得できる「おみくじ」が新たな取り組みとして実施された。

また参加団体の中でもひと際注目を集めたのが、丹波篠山市を拠点に活動するボランティア団体「ええやんハウス」である。

この団体は地域の保全活動を目的とし、若者が地域住民と協力することで「若者が高齢者を含む地域住民との交流を通じ、若者が地域に関わる第一歩を後押しすること」を中長期的なビジョンとしている。

毎月第2、第4日曜日に丹波篠山の土地所有者や土木技術者やツリーハウスの建設作業に取り組み、自然・環境に触れながら地域活性化につながる経験を積むことを目指している。

団体には前述の目的を達成する事に留まらず、建築・土木の実践的な経験を積みたい理工系の学生を含む約12人が参加する。また、文系・理系の垣根を超えた幅広い知識と経験の獲得を目指す有志も多く参加し、仲間との協力を原動力に挑戦を続ける活動が特徴である。

事実2日間での延べ参加者は、合計18名と規定部員を上回る結果を達成するなど団体としては拡大傾向にあり、取材に応じた同団体の広報を務める堀雄貴さん(工学部4年)は結果に手ごたえを感じている様子であった。

一方子育て支援に力を入れているのはボランティア団体「結(Musuv)」である。

三田・北地域で関西学院大学初のイベントボランティアサークルとして活動している彼らは、「学生×チャレンジ×地域」をテーマに2024年4月の設立後、学生だからこそできるチャレンジや発想力を活かしたイベントの企画・運営等を行っている。

結(Musuv)の代表者(2026年現在)の松原宗太郎氏によると「三田市は、以前からベッドタウンとして活動が進み人口が増えてきた地域ですが、今はかつて子供だった世代が大学生や社会人となって都市部へ流出しています。そうした中で子供達には『三田市はいい町なんだ』と感ずってもらいたい」と語った。

また、神戸三田キャンパスのボランティア全36団体の活動は横断的でありイベントを計画する際は互いにブースを出し合う時もある。

横のつながりを意識した出展団体と呼び込むことで学生主体の自立的なイベントを作っていくことを大切にしている。

特に理系の学生の多さを生かしたブースは、理系的な実験などといった普段の学校の授業ではなかなかできない体験を提供できる。松原氏は「学術的な堅いものではなく、ボランティアとして、できるだけ子供たちに楽しんでもらい、それが三田市での思い出になってくれたらいいなと思っています」と述べた。

毎年9月に行われる合宿では1回生が主体となつて1泊2日の旅程を企画するなど、低学年のうちから運営企画・広報を意識することで、3回生になった際に独自性を活かしたイベント運営を行えるようになり、より地域へ目を向けられるようになることで密着度を上げている。

最後に今回のボランティアエキスポの手ごたえを尋ねると、「昨日の来場者数は18名で、今日は19名。計37名の方に来て頂きました。ボランティアに興味を持ち、そのなかでも結を選んで訪れてもらえたことに手ごたえを感じています」と力強く語った。三田市×理系の可能性はまだまだ計り知れない。

(小林颯翔・北村勇成)

ボランティアを始めるきっかけに

ボランティアEXPO開催

ボランティア活動支援センターヒューマン・サービス支援室学生コーディネーター(学生CO)は4月14日と15日、学生会館旧館2階ホールで「ボランティアEXPO in 西宮上ヶ原」を開催した。

新入生を中心に231人が来場した。

ボランティアEXPOとは、関学大生が所属するボランティア団体を中心にブースを出店し、ボランティアに興味をもつ学生に各団体が活動内容を紹介するという催し物だ。今回は西宮市社会福祉協議会を含む23団体が参加した。

「関学COLORS」は「地域のあたたかさを感じられる」大阪府池田市公認の学生団体「関関COLORS」は、同市の栄町商店街を中心とした地域活性化を行う団体だ。関学大生と関学大生のみが所属できる。

同団体に所属する藤本琴子さん(法学部3年)は団体の魅力を「イベント事業を企画から行うので、自分がしたいことが実現できる」と語った。

西宮市社会福祉協議会ボランティアセンター「安心して暮らせる町に」西宮市社会福祉協議会のボランティアセンターは、ボランティアをしたいという市民の方とボランティアを繋げていく。

特徴的な活動として、重度の障害者の方でもボランティアに参加出来る取り組みを行っている。西宮市に住む一人一人が自分たちの手で地域を作るという気持ちを重視して活動している。

同団体の本田沙織さん(本学文学部卒)は「ボランティアを通じて様々な出会いが経験になる。まずは、一歩踏み出してみることと視野が広がる」と笑顔で話した。

学生COの尾崎陽向さん(社会学部2年)は今回の開催の目的について「ボランティアを身近なものとして感じてもらう、大学で新しいことを始めたいという人のきっかけになつたらいいな」と意気込んだ。前回との違いを尋ねたところ「入り口にボランティア団体が書かれたくじ引きを設置し、気軽に自分にあつたボランティア団体を見つけたらな」と工夫した点を語った。

ボランティアEXPOに参加した山下紫季さん(人間福祉学部1年)は「今回のボランティアEXPOで色々なジャンルのボランティアがあることがわかった。ボランティアに参加して色々な経験をしたい」とボランティアへの意欲を語った。

(緒方佳帆)



関関COLORS 法学部3年の藤本琴子さん＝2026年4月14日、小島桜弓撮影

人間福祉学部・藤井美和教授

ADEC 受賞記念講演会

関西学院大学人間福祉学部
研究会は3月14日、関西学院
会館レセプションホールで
「藤井美和教授 ADEC A
cademic Educa
tor Award 受賞記念
講演会」を開催した。藤井美
和教授による記念講演「生き
る意味を問いなおす―死生学
の展開―」、パネルディス
カッション「藤井ゼミ卒業生
を囲んで」が行われた。
Association

for Death Educa
tion and Cou
nseling (ADEC)
は、死生学教育、研究、実践
を推進する国際的な学会であ
る。2025年4月、ADEC
における「Academi
c Educator Aw
ard」を人間福祉学部の藤
井美和教授が日本人で初めて
受賞したことを記念し、講演
会が開催された。

藤井教授はアメリカで研
究した内容と死生学を学び教
えてきたことを、自身の体験
とともに語った。
藤井教授は大学で法律を勉
強し、新聞社に就職した。し
かし、全身麻痺になる神経難
病に襲われた。この死に直面
した経験をきっかけとして、
「何のために生きるのか」と
いう問いを突きつけられた。
それが死生学を研究するきっ
かけとなった。

多くの人は生と死を対極の
ものと捉えがちだ。しかし、
死生学では生と死を切り離せ
ないひとつのものとして考え
る。藤井教授は死生学を「死
を含めて生きることを考える
学問」と定義する。
死生学では「人称」を重要
な問題のひとつとして捉え
る。人称によって死の捉え方
は変わる。情報として見る客
観的な死、愛する人の死、自
分の死。いのちの問題は、常
に「どの立場から語っている
のか」という視点が不可欠で
あるという。

また、死生学のもうひとつ
の重要な点は人間理解であ
る。人間を理解しようとする
とき、死生学では人を「全人」
として捉える。科学は「生き
る意味とは」という根源的な
問い（スピリチュアリティの
領域）を十分に扱いきれな
い。しかし、生きる意味や存
在価値を問うことは人間に
とって極めて重要なことであ
り、死生学はその重要性を問
い直す。
藤井教授は「社会は人では
ない」と強調する。社会の価
値観は社会の多数派の人々が
持っている価値観であるた
め、個人が変わらなければ社
会は変わらないという。その
ため、ひとりひとりが自分の
価値観を問うことが重要であ
る。そのための教育が死生学
なのである。

死生学のプログラムである
「死の疑似体験」では、がん
で亡くなるまでの架空の闘病
日記を読み上げ、症状が悪化
する過程に合わせ、受講生が
紙に書き出した自分の大切な
ものを一枚ずつ破っていく。
最後の一枚を破った後に、そ
のときの自分の気持ちを振り
返る。
最後まで残るものの多く
は、「形のない大切なもの」
か「大切な人」であるという。
学生たちのコメントも、死を
通した生の在り方を見つめる
まなざしと自身を包み込む愛
への感謝で満ちている。
藤井教授は死に直面したと
き、「私は何のために生きて
きたのだろう」「私の人生の

意味は何だったのだろう」と
涙が溢れたという。その実存
的な痛み（スピリチュアルペ
イン）を抱える中、「生きて
いていい」と思えたのは、「自
分を徹底的に受け入れてくれ
た人がいたから」だと語る。
手鏡を使い命がけで窓の外
の船を見させてくれた同室の患
者、共に泣いてくれた看護師、
毎日様子を見に来てくれた主
治医、そして「あなたに会え
るのが嬉しい」と笑顔で会い
に来てくれた母。カウンセリ
ングなどの専門的なケアでは
なく、生身の人間として自分
をまるごと受け入れてくれた
人たちの存在が、藤井教授に
これまでと違う世界を見せて
くれたという。
私たちは生まれたとき、何
も持っていない。しかし、生
きていくうちに、学歴や教
養、財産、社会的地位など、
いろいろなものを身につけて
いく。それらがいつの間にか
自分の価値にすり替わり、そ
れらがなくなると価値がない
と思ってしまう。しかし、「も
ともと何もなくてもよかった
はずなんです」と力を込める。
何もできない自分の存在を
そのまま受け入れられた経験
が、藤井教授に『在る、存在
しているのが先だ』という気
づきをもたらしたという。そ

して、このように人の価値観
を変えるものはいったい何か
と考えた。それは、「無条件
に与えられる愛」だったと振
り返る。
最後に、周囲の人々への感
謝を述べた。死生学を研究し
続ける力となったのは、学生
やゼミ生、大学院生の存在
だったという。さらに、人生
の在り方を生き方で示してく
れた恩師や友人、家族への思
いを述べた。「私をまるごと
受けとめ、一緒にいてくれる
家族に心から感謝したい」と
語り、講演を締めくくった。
パネルディスカッションで
は、藤井ゼミで学んだ3名の
卒業生が登壇した。登壇した
のは、宮崎敦子氏、安井優子
氏、長野知里氏である。藤井
教授の死生学教育が自身の人
生に与えた影響を語った。
宮崎氏は、父を亡くした経
験をきっかけに藤井ゼミを志
望した。悲しみを家族で共有
すること、悲しみに向き合う
ことが十分にできていなかった
ため、「自分の思いに一度
しっかりと向き合おうべきだ」と
考えた。
そして、藤井ゼミは「正解」
を導く場ではなかったことが
印象に残っているという。「み
んなの思いを分かち合いなが
ら、議論をする過程そのもの
を大切にすることができた」と振
り返る。
卒業後、金融業界に就職し
たものの、自分の価値観との
葛藤を経験し退職し、福祉の
道へ進んだ。藤井ゼミでの学
びは、「知識として使うもの
ではなく、気づけば自分の判
断の前提となっているもの」
だと力を込めた。

安井氏は、夫との死別が死
生学との本格的な出会いと
なった。看護師として働く中、
緩和ケア医の夫からの影響
で、藤井教授の死生学を科目
履修生として受講していた。
夫ががんを発症したとき、2
人で藤井教授からの手紙を読
み、涙が止まらなかった。
夫の死後、悲嘆に暮れる
日々の中で思い出したのは、
死生学の授業、そして夫から
の「いのちの大切さを伝えて
ほしい」という言葉だった。
「夫から教わったことを自分
の言葉で伝えていける自分に
成長して生きていきたい」。
そう考え、38歳で関学大に入
学し、藤井ゼミで死生学を学
んだ。
卒業後は大学院に進学し、
現在は上智大学で社会福祉と
死生学を教えている。また、
学生が研究室を自由に訪れる
「よつやカフェモンク爽風
庵」にて、学生の声に耳を傾
けている。
長野氏は、困難な家庭環境
の中で育ち、「なぜ誰も助け
てくれなかったのか」という
思いを抱え社会福祉を志し
た。そして、偶然読んだ関学
大パンフレットから死生学を
知り、進学を決意した。入学
後、「死の疑似体験」を通し
て「家族を許したい」と思っ
ていた自分に気づき、「人を
憎んで生きていくのはやめよ
う」と自然と思えた。
卒業後社会人となり、次女
に生まれてきた聴覚障害がある
ことがわかったとき、自分の
価値観を問われた。そこで学
生時代の死生学のノートをも
つ張り出し、泣きながら読
み返したという。死生学を含
めた大学での勉強が「セーフ
ティネットのように絶望の
淵から守ってくれたような感
覚だった」と語る。
そこで卒業後初めて藤井教
授にメールをし、藤井教授の
言葉から「この子がいてくれ
るだけで幸せなんだ」という
ことを起点に物事を選択でき
るようになった。困難にぶつ
かったときや人生の岐路に
立ったとき、何が大切なのか、
それを実際に大切にできてい
るのかを問うという。「そう
できる心のあり方を、死生学
から、藤井先生から学んだの
だと思います」。
3名は最後に、藤井教授の
死生学教育が自身にどのよう
に働いているのかを語った。
長野氏は「これからの私の人
生のバイブルであり、人生の
羅針盤」と表現した。安井氏
は、死ですべて終わるという
死生観が、死後もなお亡き人
との関係はつながっていると
いうものへと変わったと振り
返る。宮崎氏は、経験と重なり
ながら実感として自分の中
に蓄積されるものだと思っ
た。

藤井教授は3名の話を受
け、生きることは何かを獲得
していくことだと考えられが
ちである中、「目に見える世
界や獲得する世界を越えたと
ころに広がる世界がある」と
説いた。そして、いのちの価
値が相対化され、選別される
現代においてはこうした視点
こそが重要ではないかと呼び
かけ、ディスカッションを締
めくくった。（山須田優）



藤井美和教授 ADEC Academic Educator Award 受賞記念講演＝2026 年 3 月 14 日、関西学院会館レセプションホール、渡邊暖菜撮影

教授の背中

人間福祉学部

池埜聡教授

理論と実践の往復で

「人」をみつめる

人間福祉学部で教鞭を執る池埜聡教授が社会福祉の道を志した原点は高校時代にさかのぼる。もともと、「弱い立場に置かれた人の力になりたい」と漠然と考えていた。高校1年生の終わりのある日、突発的に家出をし、その帰路で「養護学校の先生になろう」と直感した。その感覚に従い、養護学校を見学し、「よし、この道に行こう」と心を固めた。

「社会福祉学」という学問の存在を知り、関西学院大学社会学部に進学後、武田建先生（関西学院大学名誉教授、元理事長・元学長）と出会う。武田先生の「まず人を勉強せなかん」という言葉に感動し、武田ゼミに入った。

しかし大学時代の児童相談所での実習で、制度や手法が十分に整っていないことに落胆した一方、現場に飛び込む勇気のなさを痛感した。「半分は落胆、半分は勇気がなかったから大学院に行った」と語る。

大学院時代の実習先に修士課程の途中から就職し、修士課程修了後も勤め続けた。しかし、27歳のときにこのままではいかぬと自問することが続いた。悩んだ末、淀屋橋駅の3番出口、階段を上る途中の踊り場で、「アメリカに行こう」と突然決意した。

決意から半年後、28歳の手前でワシントン大学の修士課程に進んだ。実習先の東南アジア系難民を支援するクリニックでは、今まで学んだ技術が一切通用しなかった。「鼻をへし折られたところか、地面に叩きつけられた」と振り返る。

2つ目の修士号を取得後、引き続きそのクリニックに2年間勤務した。その後、カリフォルニア大学ロサンゼルス校の博士課程に進んだ。

博士課程中、一時帰国した際、自宅で阪神・淡路大震災に遭遇した。アメリカに帰った後にPTSD症状に苦し

み、その後母が突然死した。この経験から、トラウマが大きなテーマになった。

当時の日本のトラウマ研究は、精神科医による「疾患（PTSD）」としての枠組みが主流であった。しかし、「心」だけに焦点を当てると社会や環境の要因を無視してしまう。ソーシャルワークの視点では、環境の中の人間をみる。人を全人的に捉えることが重要だという。

最後にこう問いかける。「ここ」はどこにあると思いますか？「多くの人は胸を指す。宝石のような綺麗な心」が核としてあると思ひ、探さずとも思ひ。

しかし池埜教授は、胸や頭にあるものではないと考えた。「ここ」は、これまでの自分や人とのつながりの中にある。そして同時に、流動的で絶えず変化している。「今、この瞬間」の対話や空間を大事にしないと、「ここ」はみえない。

「人」を中心に据え、理論と実践を往復しながら、人が自らの人生の主人公として生きていく過程を支える。それが池埜教授の体現するソーシャルワークである。

（山須田優）

デジタル版はこちら



人間福祉学部・池埜聡教授が語る

マインドフルネスと

その先にある豊かな「気づき」

不安や怒り、焦りといった感情が、時に自分自体を支配してしまうことはないだろうか。あらゆる思考が休まず頭の中を駆け巡り、少しも落ち着かないような状態。負の思考は続くストレスとなり、やがてうつ状態を招きうる。

そうしたネガティブな感情や思考と距離を置き、過去や未来の物事にとらわれず、「今、この瞬間への気づき」を得る心のあり方。それが「マインドフルネス」だ。

今、この瞬間への「気づき」とは、この場合の気づきは、「今に意図的な注意を向け、気づいたものを何も評価せず、とらわれない状態でただ気づくこと」を示す。つまりマインドフルネスの状態

では、今、この瞬間に意識的に注意を向け、その瞬間の様子に「ただ気づく」のだ。

その気づきを深めていく練習が瞑想だ。マインドフルネス瞑想法の1つである呼吸瞑想は、自らの呼吸へと注意を向ける。呼吸の瞬間の鼻を通る空気の温度など、身体に現れる感覚に気づいていく。

瞑想中、呼吸に注意を向けていても、頭にはよく他の考えが浮かぶ。マインドフルネスを研究する池埜聡教授（人間福祉学部）は、考えが現れることは問題ではないと強調する。「心のおしゃべり（考えやストレス）は出て構わない。それに気づいて、また呼吸に「戻っていく」。瞑想ではこの注意の移ろいを何度も

繰り返す。

肝心なのは、考えを手放し、注意を今、この瞬間へ戻すということだ。池埜教授は、考えから注意を今に戻すと「心のおしゃべりと自分がちよつと距離を取れる」と話す。すると考えに支配されつらくなり、自らを少し客観的に見られるようになるという。こうしてマインドフルネスはいわゆるメタ認知能力を高め、考えが出てくる自分に気づく、もう一人の自分を育んでいく。

マインドフルネスを行うと、ストレスを抱えにくくなり、ストレスに関わる脳の構造が変化するには、6〜8週間のマインドフルネスの継続が必要とされる。そのため効性は乏しい。

しかし、マインドフルネスは「万能でも、特効薬でも何でもないけれど、人生の豊かさにつながるもの」だと池埜教授は考える。

池埜教授自身、人生における豊かな変化を実感した。「ほんと穏やかになった」。マインドフルネスを始めてから、そう奥さんに言われたという。「今でもカッとしたりす

るけれど、ストレスとの付き合い方は変わってきた」と自身への変化を語る。

他にも人生における豊かな変化を感じたのは、ある実業家の男性だ。ずっとビジネスに必死に力を注いできたが、家族との離別を経験した。ビジネスには成功したものの、激しい虚しさが後に残った。その後マインドフルネスを始めた男性は、世の中の美しさに気づくようになる。

「私は、何十年通っていた道に花が咲いているとすら知らなかった。でも、それに気づくようになった。これがどれだけ人生にとって大きなことだったか、ようやく分かった」と、男性は池埜教授に語った。

マインドフルネスは自分だけではなく、周囲とのつながりの豊かさを気づかせてくれる。今、この瞬間も、自分や身の周りに確かに花は咲いているはず。その花への気づきこそが、少しずつ、「ここ」を豊かにしていく。

（高尾亮史）

デジタル版はこちら



モン族の刺繍について説明する池埜教授（2026年2月26日、池埜教授研究室、今村早織撮影）



池埜聡教授＝本人提供

災害に強いまちづくりシンポジウム

「神戸から考えるこれからの災害の備えと復興」

関西学院大学災害復興制度研究所はANCHOR KOBÉ（神戸市中央区）にて3月20日、災害に強いまちづくりシンポジウム「神戸から考えるこれからの災害の備えと復興」を開催した。

第1部では岡田憲夫氏（同研究所顧問・京都大学名誉教授）、羅貞一氏（同研究所主任研究員・准教授）、加古裕一郎氏（神戸市危機管理局副局長）が発表を行った。また、関西学院大学生がボランティア活動を報告した。司会

は山泰幸氏（同研究所長・人間福祉学部部長）が務めた。第2部では山氏、岡田氏、羅氏、加古氏によるパネルディスカッションが行われた。

第1部の岡田氏の発表のテーマは「激甚災害からの地域復興―阪神・淡路大震災から能登半島地震まで」。コミュニティに着目し、阪神・淡路大震災から能登半島地震にかけてどのような変化が起こったのか、何を学んだのかを講演した。

羅氏は「人間の復興」を



パネルディスカッション 2026年3月20日、ANCHOR KOBÉ、山須田優撮影



関西学院大学生による「能登半島地震の現地ボランティア活動」の報告

目指して「市民・地域とともに歩む災害復興制度研究所」をテーマに、災害復興制度研究所の概要やこれまでの活動と成果、今後の展望と方向性を紹介した。

加古氏は「災害に強いまちづくり―過去の教訓とこれからの取り組み―」をテーマに、神戸市での災害に対する様々な取り組みについて解説した。

関西学院大学生は、ボランティア活動支援センターのヒューマン・サービス支援室が主催する「能登半島地震現地ボランティア」の第8回・第9回への参加を通して学んだことを報告した。

第2部のパネルディスカッションでは、第1部の発表を踏まえ、山氏が岡田氏、羅氏

加古氏に質問を投げかけ、3氏がそれぞれ答える形で行われた。岡田氏は、コミュニケーション・スペースについて、羅氏は日韓の災害対応の違いについて述べた。加古氏は、「想定外を想定内」という言葉を説明した。

最後に山氏は、「超高齢社会において地域が弱っているとき、何が 필요한のか」と3人に問いかけた。

岡田氏は「誰が何をするのか、誰と誰が何をするのか」という手語をはっきりさせることと、加古氏は、行政・市民・外部が協働で取り組んでいくこと、羅氏はボランティアだけに頼るのではなく、住民の活動のための協力的なガバナンスをつくることが重要だと語った。（山須田優）

関学大法学部卒・甲南大松原英世教授 刑事制度の周縁に光を当てる

「日本では、死因が十分に究明されていないという事実を、もっと多くの人に知ってほしい」。そう話すのは刑事政策・犯罪学を専門としている松原英世教授（甲南大学法学部）だ。関西学院大学法学部を卒業し、「刑事制度の周縁」に注目しながら、刑事制度のあり方を研究してきた。

今回は松原教授の最近の研究に焦点を当てて、話を伺った。

日本の死因究明制度に警鐘を鳴らす
ここしばらくは、日本の死因究明制度のさまざまな問題意識を抱き、法医学者などと研究が続いている。

日本では死因が分からない場合でも、死体の解剖が行われる割合は小さい。実際に日本の死体の解剖率は全国平均で1割程度と極めて低い。解剖率が低かったり、十分な検査が行われなかったりと、死因究明が不十分である可能性がある。日本では、死因が十分に究明されていないという事実を、もっと多くの人に知ってほしい。



松原英世教授の講義の様子 本人提供

また、死因究明の目的自体も考え直す必要がある。日本では犯罪捜査を目的として死因究明が行われている。一方世界的には「公衆衛生」が目的であることが一般的だ。死体の解剖率が高い国では、どのような事故が起きているのか、どんな薬物が流行しているのか、どんな疾病リスクがあるのかといったデータが蓄積される。そうしたデータがあれば、類似の事故や死亡を防ぐことができる。だが死体の解剖率の低さ故に、日本にはそのデータ自体が十分にならぬ。

遺族の現状も踏まえて、一定の要件に当てはまった場合には（自動的に）死体の解剖を行い、死因を究明する制度が望ましい。

「自己責任はフィクションだ 刑事責任を問うとは、つまり自己責任を問うことだ。我々の社会は自己責任なくしては成り立たない。」

だが、自己責任はフィクションだ。（劣悪な養育環境で生きてきた人などが）問題解決のための唯一の手段として犯罪をしたならば、それはその人自身の責任なのだろうか。（社会が）自己責任を重視していることが、すぐ生きつらくしているんじゃないか。

か。

―法学の面白さ

これまで社会学や心理学者らと多くの共同研究を行ってきた。学際的な共同研究に取り組むなかで、法学の面白さを実感するようになった。社会現象を事実として捉えながらも、それを分析する過程で法理論を使っていくと「あつ」と思っている。

―学生へのメッセージ

サンフランシスコ大学の広告に「WHERE DEVIATION IS STANDARD」だ（劣悪な養育環境で生きてきた人などが）問題解決のための唯一の手段として犯罪をしたならば、それはその人自身の責任なのだろうか。（社会が）自己責任を重視していることが、すぐ生きつらくしているんじゃないか。（聞き手・今村早織）



サンフランシスコ大学の広告 本人提供

全部一生懸命にやったからこそ今がある

関学OG・スピードスケート日本代表 長森遥南

「全部一生懸命にやったからこそ今があると思う。」——そう語るのは、ミラノ・コルティナ2026冬季オリンピックにスピードスケート日本代表として出場した、関学OG長森遥南さん（教育学部卒）だ。

長森さんは、ミラノ・コルティナオリンピックスピードスケート女子1500メートルに出場し、全体13位の成績を残した。大会のなかで印象的だったこととして、長森さんは選手村での他競技の選手との交流の場面を挙げた。それぞれが特別な思いを抱いて臨む大会だからこそ、選手たちがオリンピックに懸ける情熱を強く感じた。モチベーションの維持方法など、自身の競技にもつながる有意義な会話もあったと語った。

長森さん自身、オリンピックなどの緊張する場面では「緊張も楽しんだもん勝ち」だと考えているという。懸けてきた思いがあるからこそ人は緊張をする。そして緊張を感じる瞬間というのは、自信

を持つて挑んでいい瞬間だと強調した。国旗の重みさえも笑顔で受け止め、楽しむ姿勢でオリンピックに臨んだ。

スピードスケートは、最後まで誰が勝つか分からないという点にある。転倒や接触などがあり、レースの展開は予測不可能だ。そんな、最後まで結果の読めない面白さを感じてもらいたいと語った。

次のオリンピックではメダルを取ることを目標に掲げる。そのためには国際大会で結果を残し、ワールドランキングを付けたいと意気込んでいる。

練習や大会で心の支えとなったのは、友達や先生の存在だ。関学ではそんな友達に沢山出会えた振り返る。スピードスケート部とゴルフ部に所属し、周囲の選手と切磋琢磨し合った。同じスピードスケート部には15年近く競い合ってきたライバルもあり、同じ部活で活動する中で戦友としての意識が強く芽生えた。

長森遥南さん 2026年3月25日、株式会社シユゼット・ホールディングス西宮本社、八島みのり撮影



起業でつなぐ社会の架け橋

工学部2年 酒井涼雅さん



酒井涼雅さん＝本人提供

酒井涼雅さん（工学部2年）は、ソフトウェア開発を軸に起業の道を進んでいる。彼は、技術を社会課題の解決へつなぐ「コネクタ」を目指す。

起業への関心を持ったのは、高校1年時に参加した神戸市主催のシリコンバレー研修プログラムだった。プログラムを通じ、起業という選択肢に触れたことで、その後の方向性が定まったという。

現在は、主に三つの軸で活動している。一つ目は情報系

インカレサークル「Tech.U-ni」の運営だ。代表者としてアプリ開発やプログラミングの初学者向けイベントを企画し、技術を志す大学生に伝える場を創出している。

二つ目は実社会への参画である。東京大学の大学生チームにエンジニアとして加わり、活動をしている。特に農業分野における情報の非対称性に着目し、資材のレビューサイト開発に携わる。酒井さんは、「技術があっても、それを社会にどう実装するかが重要」と強調した。

三つ目は個人事業主としての活動だ。すでに個人事業を始めており、中小企業向けのウェブ制作などを手がけている。「やりたいことがあっても形にできない人と、課題を抱える企業をつなきたい」と

酒井さんの活動の根拠にあるのは、自身の技術を社会貢献へとつなげる意識だ。自身の理想像については、「多様な人と関わりながらリソースを循環させ、社会に価値を供給できる存在でありたい」と語った。

自らの技術を、誰かを助けるための手段として活かそうとする姿勢から、強い責任感が感じられる。

将来については、「世界市民として多様な人と関わりながら価値を提供し続けたい」と強い思いを語った。

技術で人と社会をつなぐ架け橋になることを目指し、歩みを進めている。

（梅田芽衣）

長谷川集平『およぐひと』

「まっつよ」といえる誠実さ



「まっつよ」といえる誠実さ

あげるよ。娘は答える。「わかった。まっつよ。」

震災に限った話ではない。現代社会は、多くの出来事をわかりやすい「物語」として消費する側面があるように思う。そして、その「物語」からこぼれ落ちる言葉にならない領域を、存在しないものとして切り捨ててはいないだろうか。

語れないものは存在しないものではない。語れない背景には、語るに値しない空虚があるのではない。言葉に表せないほどの経験が、心の震えが、切実さが沈黙となっ

てあらわれるのだ。こうした沈黙に対し、周囲が無責任な憶測でその空白を埋めてしまつことは、ときとして一種の暴力になり得る。言葉にならない領域を、そのまま不可侵のものとして尊重する態度が、現代の社会には欠けているように感じる。

私たちは、何も知らない。その人が抱えるものを「物語」として安易に消費せず、「まっつよ」と言えるか。そこに沈黙を含めたその人自身を尊重しようとする誠実さがあらわれるのではないだろうか。

（山須田優）

大学時代、長森さんは2つの部活に所属しながら、教員免許や図書館司書の資格を取得している。その原動力について、長森さんは「楽しむこと」だとまっつよに語る。平日は教育実習に参加し、金曜日の夜に関西から試合が行われる長野へ移動し、試合に出場していた。また、教育学部

に所属していたが、図書館司書資格の取得のため、2つのキャンパスを行き来しながら学んだ。

長森さんは「楽しみながら取り組んだからこそ、やり切ることができたと思います。友達や先生、教育実習先の生徒たちと過ごす時間に癒され、それが原動力になっていました」と振り返った。

最後に、「4年間は一瞬のようでしたが、とても濃い時間でした。全部一生懸命やっただからこそあると思います。だから、一瞬一瞬を大切にしたい。大学生活でしか学べないものが必ずあります。沢山遊んで、たくさん笑って大学生活を過ごしてください。」と関学生へメッセージを送った。

（渡邊暖菜）

コーヒーアワー開催 会話から国際交流へ

コーヒーの香りが漂う会場に、日本語と英語が入り混じった笑い声が広がった。4月30日、西宮上ヶ原キャンパスの関西学院会館レセプションホールで、関西学院大学国際教育・協力センター（CIEC）主催の国際交流イベント「コーヒーアワー」が開かれ、日本人学生や留学生ら約135人が集まった。

テーブルを挟んで向き合う学生たちは、クイズの答えを相談するうちに会話を弾ませた。正解が発表されるたび、各テーブルから笑い声が上がった。身ぶりを交えながら言葉

を交わす学生の姿も見られた。コーヒーアワーは、英語を使いたい学生が最初の一步を踏み出せる場として開かれている。CIECの藤本美紀さんは「英語で話したい気持ちがあっても、普段の生活では緊張してなかなか英語を話せない学生も多いのでコーヒーアワーをきっかけに一步を踏み出してほしい」と話す。

今回のゲームでは、関学大にまつわるクイズや、テーブルごとに話し合っ

て答えを考える企画が用意された。藤本さんは「全員が一緒に考えられるゲーム作りを意識している」と語る。初対面同士でも同じ問いに向き合うことで会話の糸口が生まれる。

当日の準備や司会進行を担当したのは、学生団体GS Networkだ。藤本さんは「学生団体ならではの成り立たないイベント」と語る。学生が運営に加わることで、参加者も打ち解けやすい雰囲気がつくられている。

後半のフリートークは、参加者の声をもとに取り入れた時間だ。終了後は、LINEやInstagramを交換する学生の姿が各所で見られた。

参加した国際学部3年の学生は「友達を作りたい」と話して話すと、たくさん話せた」と話した。Instagramも交換したい」と話した。いろいろな学部の友達を作りたい」と話した。

国際学部の交換留学生は、



クイズ企画に参加する学生ら。会場ではテーブルごとに会話が広がった。4月30日、西宮上ヶ原キャンパス関西学院会館レセプションホール、CIEC提供



テーブルを囲み、会話を交わす参加学生ら＝4月30日、西宮上ヶ原キャンパス関西学院会館レセプションホール、中泉奏士撮影

参加の理由を「新しい友人と出会い、新しい人と話すため」と話す。予想以上に多くの学生が参加していたことが印象に残ったという。まだ参加したことがない学生には「怖がらずに参加してほしい。英語でも日本語でも大丈夫」と呼びかけた。

コーヒーアワーには通常、200人から250人ほどが参加する。今回は雨の影響で参加者は通常より少なかったが、藤本さんは「人数が絞られたことで、より密な交流が生まれる面もあった」と話し、少人数ならではの意義を語った。

「国際交流に関心はあるが、一步を踏み出せないでいる人」に、ぜひ参加してほしい」と藤本さんは語る。会話をきっかけに広がった交流の輪は、閉会後もしばらく続いていた。

「国際交流に関心はあるが、一步を踏み出せないでいる人」に、ぜひ参加してほしい」と藤本さんは語る。会話をきっかけに広がった交流の輪は、閉会後もしばらく続いていた。

「国際交流に関心はあるが、一步を踏み出せないでいる人」に、ぜひ参加してほしい」と藤本さんは語る。会話をきっかけに広がった交流の輪は、閉会後もしばらく続いていた。

「国際交流に関心はあるが、一步を踏み出せないでいる人」に、ぜひ参加してほしい」と藤本さんは語る。会話をきっかけに広がった交流の輪は、閉会後もしばらく続いていた。

「国際交流に関心はあるが、一步を踏み出せないでいる人」に、ぜひ参加してほしい」と藤本さんは語る。会話をきっかけに広がった交流の輪は、閉会後もしばらく続いていた。

多文化共生を体験する

国際交流プログラム開催

国際教育・協力センター（CIEC）が主催のイベント「日本語・日本文化学習プログラム」が、1月27日から2月17日にかけて、西宮上ヶ原キャンパスで、実施された。

このイベントは、海外協定校の留学生と関学大がプロジェクト型研修を通じて多文化共生について学ぶプログラムだ。様々な学部

に所属する約30名の関学大生が、留学生をサポートする「日本語パートナー」として参加した。

同プログラムでは、韓国・台湾・オーストラリアの大学からの留学生と共に社会貢献性のある成果物を作成し、その発表を行う。今回は「多文化共生を実現するため私たちに何ができるか」をテーマとして動画やポスターを作成した。加えて、スライドと共にそれぞれの案のプレゼンテーションを行った。

プロジェクト活動は、留学生と日本語パートナーが混在した4、5人のチームで行われた。それぞれのチームは多様な文化的背景を持つメンバーで構成されており、協力して活動に取り組んだ。

日本語パートナーとして参加した福原悠加さん（当時・人間福祉学部1年）は、「プロジェクトを通して生活や文化の多様性を知り、互いに理解し合うことの大切さを学びました」と語った。続けて「言



成果物発表を行う留学生と日本語パートナー。2月16日、西宮上ヶ原キャンパス、渡邊暖菜撮影

葉の壁を感じる場面も多くありましたが、積極的にコミュニケーションを重ねることで、楽しく交流ができました」と話し、達成感をにやめさせた。また、留学生と日本語パートナーが共に参加できる、京都フィールドトリップや和太鼓、茶道、友禅染などの日本文化体験も開催された。

韓国からの留学生であるソ・ウォンヒさんは、「この体験を通じて、日本文化により近づくことができました。茶道体験やお茶について話を聞いたことが特に楽しく、友禅染は友達と笑い合いながら作ることができました」と振り返る。さらに、「言語の異なる友達とも完成度の高い何

（渡邊暖菜）

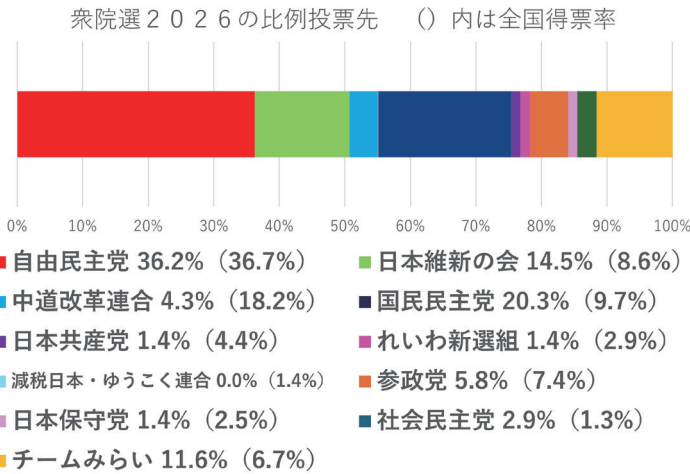
「自民」最多 次点は「国民」

衆院選2026 関学生調査

関西学院大学新聞総部は2月9日から2月28日の期間、関学大の学生を対象に2月8日に投票が行われた第51回衆院選に関する調査を実施した。

関学大のメールアドレスによる認証を必要とするネット調査と西宮上ヶ原キャンパス内での対面調査を行い、合わせて102件の回答を得た。回答数が十分とは言えないため、本調査の結果は関学大全体の傾向とは異なる可能性がある。また、全国のデータは総務省が公表した数値であり、各数値は小数第2位以下を四捨五入している。

という回答は67.6%だった。全国の投票率56.3%より10ポイント以上高かった。投票に行ったと回答した学生には比例代表での投票先を聞いた。「自由民主党」に投票した人は36.2%で、全国の得票率36.7%と同水準だった。「中道改革連合」は4.3%で、全国の得票率18.2%を下回った。「国民民主党」は20.3%（全国得票率9.7%）、「日本維新の会」は14.5%（8.6%）、「チームみらい」は11.6%（6.7%）といずれも全国での得票率より高い傾向がみられた。その他「日本共産党」は1.4%（4.4%）、「れいわ新選組」は1.4%（2.9%）、「参政党」は5.8%（7.4%）、「社会民主党」は2.9%（1.3%）、「減税日本・ゆうこく連合」は0.0%（1.4%）、「日本保守党」は1.4%（2.5%）と、



日進月歩 若者の投票率と 地方選挙の投票率の向上を願う

2月8日、第51回衆院議員総選挙が実施された。総務省によると、小選挙区選の全国の投票率は56.26%で、前回の衆院選より2.41ポイント上昇した。しかし、依然として投票率は低い。

また、総務省の年齢別投票率の調査によると、19歳や20〜24歳の投票率は他の世代と比べて低くなっている。世代間で投票率に大きな隔たりがあることは民主主義のあるべき姿なのだろうか。

このような状況では、投票率の高い高齢者向けの政策が優先される「シルバー民主主義」となってしまうのは自然なことだ。選挙に行かないことで、自分たちは損をしていると若い世代は自覚すべきだ。

最近では、選挙や政治を工

いわ新選組」は1.4%、「減税日本・ゆうこく連合」は回答数がゼロだった。「参政党」は5.8%、「日本保守党」は1.4%、「社会民主党」は2.9%だった。

また、ネット調査では各政党に投票した理由についても聞いたところ、回答では「政策」と「投票マッチング」という言葉が目立った。各政党が打ち出している政策やそれに基づき投票行動を決定する学生が多いと考えられる。

(仲悠士)

ボランティア活動支援センター 開設10周年 関学生とボランティアがより身近に 11月に記念行事も

関西学院大学ボランティア活動支援センターおよびヒューマン・サービス支援室が、4月1日で開設から10周年を迎えた。1995年の阪神・淡路大震災を起点とする関学大のボランティア精神は、組織改編を経て、現在も学生主体による被災地支援や地域貢献の柱として受け継がれている。

同支援室の前身は、1995年に設立された

「ヒューマンサービスセンター(HSC)」にさかのぼる。HSCは、未曾有の大災害となった阪神・淡路大震災を受け、教員と学生が一体となったボランティア組織として誕生。以来20年にわたり、被災地支援の現場で継続的に活動してきた。

2016年4月、大学側は組織の位置づけをより明確化するため、「ボランティア活動支援センター」を設置。同時に実務を担う「ヒューマン・サービス支援室」を構え、学生組織である「学生コーディネートター(学生CO)」との協働体制を確立した。また、3年目の2018年には神戸三田キャンパスでも支援室の開設がスタート。より多くの学生がボランティアに参加しやすい体制が整えられた。



同組織が入る建物

同センターの活動は、学内活動にとどまらない。同センターや「推し活」と捉える風潮が動画サイトやSNSを中心に広がっている。選挙や政治のエンタメ化は政治参加のハードルを下げ、若い世代の投票率向上に大きく貢献するかもしれない。若い世代には様々な入口から選挙や政治に関心を持ち、投票に行くこと、行かないことの意味を考えてほしい。

また、衆院選以降、西宮上ヶ原キャンパスのある兵庫県西宮市や近隣の大阪府豊中市で市長選挙が行われた。西宮市長選の投票率は39.63%、豊中市長選の投票率は38.76%と極めて低かった。

より生活に直結するとも言える地方選挙の投票率がこれほどまでに低い状況は問題で

ある。

有権者は自分たちの1票で行政サービスが変わるかもしれないと考えて、投票するかを決めるべきだ。

来年には統一地方選があり、多くの自治体で選挙が行われる。地方選挙の重要性が社会全体で共有され、投票に行こうという機運が高まることを願う。

2016年の熊本地震、そして記憶に新しい2024年の能登半島地震でも、学生の主体性を尊重した現地ボランティア活動を実施している。

ボランティアに関心のある学生と地域をつなぐ「ハブ拠点」として、関学生の社会との出会いと関わりを支え続けている。

(田川翔)

節目を記念し、11月14日には学内で記念トークイベントとワークショップが開催される予定だ。これまでの活動の歩みを振り返るとともに、これからの時代におけるボランティアやつながりの在り方を展望する。

(田川翔)

理系のリアルを徹底調査！

神戸三田キャンパス（KSC）の実態と魅力

豊かな自然に囲まれた兵庫県三田市に位置する関西学院大学 神戸三田キャンパス（KSC）は、1995年に総合政策学部設置とともに開設されてから30年を迎え、大きな変革期を迎えている。

2021年の学部再編を経て、理学、工学、生命環境、建築、総合政策の5学部体制となった同キャンパスは「境界を越える革新者（Borderless innovator）」の育成を掲げ、最先端の研究と独自の学生文化を両立させている。理系学生団体「Mains」と共同で実施したアンケートの結果と、最新の教育・施設環境から、「リアルな実態」をひも解く。

キャンパスライフの起点となる通学環境は、KSC特有の利便性が光る。キャンパス中央のバスロータリーには、大阪や三宮からの直通便が乗り入れ、学生からは「必ず座れるため、移動時間を有効活用できる」と高い評価を得ている。また、他キャンパスにはない「許可制の車通学」が認められている点も、研究で多忙を極める理系学生にとって大きなアドバンテージだ。

学内施設は「集中と交流」を軸に整備されている。自習や休憩の拠点となる「アカデミックコモンズ」や女性に好評な「パウダールーム」、2025年4月開設の「C

o-Creation Village（C-ビレッジ）」など、生活の質を高める設備が充実している。周辺に娯楽施設が少ない点についても、学生たちは「かえって勉強に集中できる」とポジティブに捉えており、研究に没頭できる環境が整っているといえる。

学びの質においては、私立大学の枠を超えた環境が用意されている。生命科学系では一人一台の生物顕微鏡が完備され、さらには兵庫県佐用町にある世界最高性能の放射光施設「Spring-8」を授業で活用するなど、本物の科学に触れる機会が豊富だ。

特筆すべきは、研究を象牙の塔に閉じ込めない「社会実装」への姿勢である。重点研究テーマ「持続可能なエネルギー」では、人工光合成や次世代パワー半導体といった産業界注目研究が進む。これに加え、日本IBMと共同開発した「AI活用人材育成プログラム」を全学生が履修。理系の専門知を社会課題の解決に結びつける「アントレプレナーシップ（起業家精神）」の育成にも力が注がれている。

KSCの魅力は、教室内の学びにとどまらない。文理の枠を超えてSDGsを学ぶ「KSC総合教育科目」や、学科の枠を超えて学びを深める「マルチプル・メジャー」

KSC 施設篇Ⅰ

- ・Ⅰ～Ⅷ号館
↑(授業、実験室、研究室)
そのほか食堂(2棟)、動物飼育棟、アカデミックコモンズがある!!
- ・アカデミックコモンズは学生が自習やくつろいだりする場所!!
- ・女性Ⅷ号館のパウダールームを使うことができる!!

アカデミックコモンズ→

KSC 施設篇Ⅱ

- ・参考文献で図書メディア館にこもる
- ・トイレがきれい
- ・コモンズ内にあるbizcafeで無料ドリンクがもらえる!!
- ・生協コンビニとFamily Martがある
- ・自然が多く、近所に娯楽がないのでかえって勉強に集中できる!!

実験レポートで深い考察をするには参考文献が必須!!!!

献血初参加のきっかけに

2026年度春の献血週間を開催

宗教総部献血実行委員会は4月15日から17日、23日から24日にかけて、西宮上ヶ原キャンパスで春の献血週間を開催した。5日間で合計415人が献血に参加した。

初日は悪天候となり、献血実行委員会の荒木悠来さん（文学部2年）は「雨だから立ち寄ってくれる人が少ない」と苦勞を打ち明けた。そんな中でも入学したばかりの新生入生に來てもらいたいと思いを語った。近年は若年層の献血参加人数が減っているため、今後は血液提供者の継続的な参加が不可欠であるという。

荒木さんは「もらって嬉しいものを用意して、プレゼン目当てでも参加してもらえようようにしている」と、なるべく多くの学生に参加してもらったための工夫を凝らしていることを口にした。

宗教総部献血実行委員会による献血週間は毎回、兵庫県赤十字センターの協力のもと行われている。これまでにも開催してきた回数は1000回を超えるという。兵庫県赤十字センター献血推進課主事の池田恵理子さんは「若い人が献血週間について「若い人が中心に協力してくれて、初めて献血するきっかけになる場所になっている」と語る。大学だと友人と一緒に参加でき、初めてでも足を運びやすいと大学での献血活動の意義を話した。



宗教総部の荒木悠来さん(文学部2年)＝2026年4月15日、今村早織撮影

「これは『さよなら人類』で一世を風靡したバンド「たま」の楽曲の一節だ。1990年にメジャーデビューし、「たま現象」と呼ばれるほど話題になった。一見するとシニールな言葉遊びのように思える彼らの曲は、聴き手によって千差万別の景色を見せる。自由な解釈を許容する余白があるからこそ、私はそこに自分なりの意味を見出すには足りない。

この歌詞を聴くたび、私は考える。「こでいう月」とは、大切な誰かと出会い、その関係性の中で光を放つ自分のことではないか。そして、「あのこ」とは、苦しみをひとりで抱えていたときの自分だ。大切な誰かと関わることで生まれる自分が眩しすぎるからこそ、かつてひとり抱えていた苦しみのカケラは、今の自分にはもうはつきりとは見えないかもしれない。しかしそれは、過去の自分を失う

月の光にじやまされてたま『さよなら人類』

これは、『さよなら人類』で一世を風靡したバンド「たま」の楽曲の一節だ。1990年にメジャーデビューし、「たま現象」と呼ばれるほど話題になった。一見するとシニールな言葉遊びのように思える彼らの曲は、聴き手によって千差万別の景色を見せる。自由な解釈を許容する余白があるからこそ、私はそこに自分なりの意味を見出すには足りない。

この歌詞を聴くたび、私は考える。「こでいう月」とは、大切な誰かと出会い、その関係性の中で光を放つ自分のことではないか。そして、「あのこ」とは、苦しみをひとりで抱えていたときの自分だ。大切な誰かと関わることで生まれる自分が眩しすぎるからこそ、かつてひとり抱えていた苦しみのカケラは、今の自分にはもうはつきりとは見えないかもしれない。しかしそれは、過去の自分を失う

供給に繋がる。池田さんは「一回きりで終わってしまった人がいいたら、患者さんのためにも400mlだと男性なら年に3回、女性なら年2回までできるので来てほしい」と継続的な献血を呼びかけた。

（小島 桜

（山須田 優

努力の先に何かが見える

関西学院大学交響楽団 コンサートマスター 小林文栄

「意思のある所に道が開ける。リンカーンやアインシュタインなどの名言を座右の銘として挙げたのは関西学院大学交響楽団コンサートマスター小林文栄さん（取材当時教育学部4年）だ。2月10日に開催した第146回定期演奏会で卒業前最後の公演を終えた小林さん。

今回の定期演奏会ではチームとしても個人としても大学生活の集大成となる演奏を目指して臨んだと語る。「無我夢中で演奏していたら5分くらいで終わったように感じた」と約2時間にわたる演奏を振り返った。小林さんは活動の中で目標の一つに後悔なくやりきることを掲げているという。

幼い頃からピアノとバイオリンを習っており、高校時代は吹奏楽部の部長を務めた小林さんは大学でもオーケストラをしたいと考え交響楽団に入団したという。その際、小林さんは「大学四年間なんてすぐに終わる。自分がどうなりたいかを考え、そこから逆算して小さな目標を作った」と話す。

小林さんは同学年の部員について「強い個性や目標があつて意思が強い人が多い代でした」と語る。皆が妥協せず意見をぶつけ合い、目標に向かって努力を重ねることができた代であり、それが昨夏のクラウドファンディングの成功などに繋がったと話した。

また、バイオリンのパートリーダーも兼ねている小林さんは大人数を束ねるという困難に直面したと振り返る。小林さんは当初、全真を同じ方向に導こうとしていたが、バイオリンパートは最も人数が多くそれぞれの事情などがある

そこで、アメリカの絵本である『スイミー』のように一人一人が異なる方向を向きながらも、集団として一つの大きな矢印になることを意識したという。交響楽団ならではのチームの在り方を見出し、困難を乗り越えたと説明する。

4年間にわたる交響楽団での活動で一番がついたと思うことについて、小林さんは「物事に付加価値をつける力」を挙げた。交響楽団の仕組みなどについては「自分たちの代で大きく変えてはいない」と語る。

その中でスポンサーを獲得するためにプロの交響楽団との差別化を意識したという。異なる学問に取り組み異なる生活を送っている学生達が、音楽を通して一つになる様子など、今まで言語化してこなかった魅力を企業に提示し、関心を引くことでスポンサーの獲得につながった。

最後に小林さんは後輩や同級生へのメッセージとして「感謝」と「謝罪」の2つを挙げた。「みんながいるからコンサートマスターという仕事が成り立っていて、スポンサーへの営業やクラウドファンディングを行う際にも色々な人に手伝ってもらった」と仲間への言葉を語った。

(佐藤朝陽)



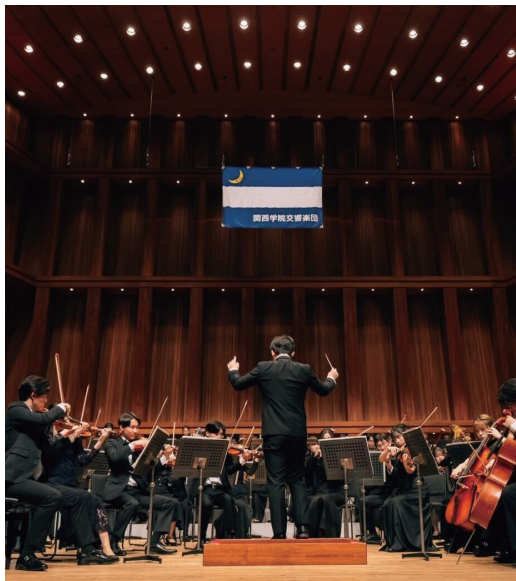
小林文栄さん＝津村晃希提供

紆余曲折の4年間 最後に響かせた音

関西学院大学交響楽団 第146回定期演奏会

関西学院大学交響楽団は2月10日、兵庫県立芸術文化センターKOBELCO大ホール（兵庫県西宮市）で第146回定期演奏会を開催した。

1951年から定期演奏会を行うなど伝統を保ちながら、テレビでの演奏や昨年行われた大阪・関西万博での演奏イベントを実施するなど新しいことに挑戦し続ける関西学院大学交響楽団。その歴史を示すようにホールの外には数多くの花束が飾られていた。



関西学院大学交響楽団の演奏＝津村晃希

た。

客演指揮として、2021年に開催した東京オリンピック・パラリンピックの開会式と閉会式の指揮で世界的に称賛を浴びた齊藤一郎氏（56）が出演。指揮台に上がる前には、コンサートマスターである小林文栄さん（取材当時教育学部4年）と固い握手を何度も交わした。

4年生にとつては最後の公演である今回の定期演奏会。小林さんは「4年間紡いできたものの集大成」と最後の公演にかける思いを語った。公演前の舞台あいさつでは部長である児島山舞香さん（取材当時経済学部4年）が4年間の感謝の思いを口にした。

約2時間にわたる公演だったが、指揮者である齊藤氏を筆頭に団員たちは最後まで躍動感・臨場感がある演奏を行い、聴衆を引き込んだ。演奏が終わった際には客席から「ブラボー！」という賛辞の声が割れんばかりの拍手がフロア中に響き渡った。

(佐藤朝陽)

個の影響力を社会貢献へ 村山恵斗さん（社会学部出身）



YouTubeのショートドラマで「5日連続遅刻」をかます冴えない新卒社員。その一方で、全国の大学ミスターコンテストで準グランプリに輝き、爽やかな笑顔と真剣なまなざしを向ける……。この極端な「ギャップ」を武器に、現代の自己ブランディングの在り方を体現するのは、村山恵斗さん（22）（関西学院大学社会学部出身だ。俳優としての顔、インフルエンサーとしての顔、多面的な役割を使いこなす彼の視線の先には、「絶滅危惧種の保護」という壮大な社会目標と理念がある。

現在、YouTubeチャンネル「サラーマンな日常」

で「坂本」というキャラクターを演じている。寝坊で5日連続遅刻し、信用を失った挙げ句「会社に寝泊まりする」とことで熱意を証明しようとする破天荒なダメ社員役を、彼は等身大の演技でこなす。

だが、その素顔は極めてストイックだ。2024年には「ミスターキャンパス関西学院」で準グランプリ、続く2025年3月には全国の王者を決める「MR OF MR CAMPUS CONTEST 2025」でも準グランプリを受賞。約8カ月にわたるファンとの対話を重視し、あるがままの喜怒哀楽をファンに対して伝えるライブ配信の姿勢を継続し、文字通り「一本」を争う舞台を駆け抜けた。

なぜ彼は、自身の露出にこだわるのか。その理由を尋ねると、明快な答えが返ってきた。「目的は、俳優やインフルエンサーとしての成功そのものではなく、獲得した知名



MR OF MR CAMPUS CONTEST 2025で準グランプリを獲得した時の様子＝本人提供

度をもとに、将来的に「野生動物保護」の事業を立ち上げること。一個人の力では、密猟や土地開発といった国際的な課題が山積する野生動物保護に関わることは困難。だからこそ、まず自分に説得力と拡散力のある「影響力」を持たせる必要がある。

村山さん自身、哺乳類の写真を見て種名を特定できるほどの動物愛好家であり、その思いの強さは、人の何倍もある。

村山さんの活動は、不確実な時代において将来に不安を抱える多くの学生に自分のやりたいこと、可能性は強い思いと行動さえ起こせば、最大化できるということを体現している。

(越智優介)

今までもこれからも選手を支える地盤として 第3フィールド開設20周年記念試合

関西学院大学硬式野球部は3月12日、関西学院大学第3フィールドでオープン戦を行い、慶應義塾大学と対戦した。この試合は第3フィールド開設20周年の記念試合として行われ、元メジャーリーガーの田口壮さん(慶應大商学部卒)が始球式を務めた。

関学大の先発投手は奥野谷栄須投手(商学部4年)。初回、2023年夏の甲子園で注目を浴びた丸田湊斗外野手にホームランを浴びるも、四回2安打2失点と粘り強い投球を見せた。打線は、先発の東京六大学リーグ2024年

秋の最優秀防御投手である渡辺和投手を相手に六回1安打無得点と捉えきれなかった。七回にも2失点を喫し、0対4と苦しい展開で終盤戦を迎えた。

しかし、七回に慶應義塾大学が投手を交代すると無死からチャンスを作り、内山彰梧選手(商学部2年)が「前でボールを捉える意識で打った」と左前へのタイムリーを放った。さらに八回には小林隼選手(法学部4年)のタイムリーなどで3点を奪い、4点ビハインドだった状況から同点に追いついた。

このままの勢いで逆転か、という雰囲気も球場中に漂ったが、関学大は九回に守備のミスから相手に4点を許し、4対8と東京六大学野球の名門に一步及ばなかった。

硬式野球部の本荘雅章監督は打線が渡辺投手を攻めきれなかったことについて「点は取れなかったが良い球を見させてもらった」と悔しさをにじませながらも、今後につながる経験をプラスに語った。また、第3フィールドについて「先方を迎えられるグラウンドを使える環境に、ありがたいなさを実感している」とグラウンドへの感謝を述べた。

(佐藤朝陽)

試合後の記念写真 2026年3月12日、関西学院大学第3フィールド、佐藤朝陽撮影



タイムリーを打つ内山選手 2026年3月12日、関西学院大学第3フィールド、佐藤朝陽撮影

関学大硬式野球部

あと一点が取れず

関西学院大学硬式野球部は4月11日と12日、阪神甲子園球場(兵庫県西宮市)で行われた関西学生野球連盟春季リーグ戦に出場した。

4月11日の試合では関西大



関大相手に力投する飯田投手 2026年4月11日、阪神甲子園球場、前川勇撮影

学硬式野球部を相手に熾烈な投手戦を繰り広げた。2回裏、関学大の飯田泰成投手(人間福祉学部4年)は一時、満塁のピンチを迎えるも0点で切り抜けた。4回裏も関西大の攻撃によりピンチに陥ったが0点に抑えた。

(前川勇)

部室 だより

フットサルサークル premier・06

2006年の創部から、節目の20年目を迎えたフットサルチーム「Premier 06」(アルミエール)。今や36名のメンバーを抱え、全日本大学フットサル大会(インカレ)全国大会に出場できる強豪へと成長を遂げた彼らだが、その道のりは決して平坦ではなかった。

かつては宝塚市や西宮市の体育館を転々とし、練習場所の確保にさえ苦慮した日々。そうした中昨年、ついに悲願の登録団体として認められ「大学公認団体」へと昇格した。

昨年度の快進撃は、まさにその「公認」の名に相応しいものだった。インカレでは兵庫県予選、さらには関西予選を相次いで制覇。創部以来初となる全国大会出場という歴史的な足跡を刻んだ。また、社会人チームも参戦する兵庫県フットサルリーグ1部でも優勝。惜しくも昇格にはならなかったものの上位リーグの関西フットサルリーグ昇格まであと一歩に迫り、大学界のみならず、地域リーグでもその名を轟かせた。

「公認になったことは、本当に大きかった」第2フィールドなど学内の施設で活動できる喜びを語る主将・坂井權仁(たくと)さん(教育学部4年)の表情には、単なる選手としてだけでなく節目を迎えたチームを率いる代表としての自負が滲む。

「部活とサークルの間という立ち位置を生かしたオンとオフの切り替えと選手の自主性」がチームの強さと坂井主将は語る。体育会のストイックさとは一線を画しながらも、ピッチに入ればスイッチが入り、時には主将として厳しい言葉も飛ばす。自分たちで考え、自分たちで高め合う。その気高さ「自主性」こそが、他大学のフットサル部と対等に張り合い、20年間成長してきた原動力だ。

現在は監督不在。坂井さんは主将と監督の二役をこなしながら、メンバー全体の戦術の「言語化」に挑んでいる。5月31日のインカレの兵庫県予選を前に、「ここまでブルをつないでくれたOB、OG、そしてここまで僕についてきてくれた選手、マネージャーのために結果でチームの強さを証明したい」と前を見据える姿は、まさに伝統のスローガン「獅子奮迅」そのものだ。

今年度はインカレ優勝・関西フットサルリーグ昇格を目標に掲げ、大学チーム唯一の「サークル」として部活動の牙城に挑んでいく。(田爪翔)



集合写真 同団体提供



田中葵さん＝本人提供

この学生に セント・フォース所属 注目! 田中葵さん

去るコンテストのステージで、ひとときわ凛とした笑顔を振りまいた女性がいる。関西学院大学社会学部4年の田中葵さん(21)だ。

大手芸能事務所「セント・フォース関西」に所属し、「ミスキャンパス関西学院2025」では、グランプリを獲得し、「MISS OF MISS CAMPUS QUEEN Contest 2026」に出場し、6冠・グランプリを獲得するなど様々な芸能活動に挑戦を続けている。

セント・フォースは、フリー

アナウンサー、タレント、キャスター、リポーターのマネジメントを主軸とする芸能事務所だ。女性フリーアナウンサーの最大手として知られ、多数のメディア出演者を抱える。田中さんは「ミス・ミスターキャンパス関西学院」への出場がきっかけで話題となり、事務所の目に留まった。そんな彼女だが、その素顔は「極度の人見知り」に悩み、自分を変えたいとあがいた一人の大学生だった。挫折を力に変え、憧れのアナウンサー職へと突き進む彼女の軌跡を追った。

虹を見たければ、雨を経験しなさい。この言葉を信じて

「かつての私は、教室で発表するだけで声も足も震え、涙が出てしまうほど内向的でした。」

現在の華やかな活躍からは想像もつかない言葉を、田中さんは真つ直ぐな瞳で口にする。中学生の頃は、人前に立つプレッシャーから落ち込む日々も経験した。そんな彼女を救ったのは、テレビ番組で高校生たちの「青春」を掲げるアナウンサーの姿だった。

「言葉一つで誰かの日常に彩りを与えられる。そんな存在になりたい」。その憧れが、彼女の中に眠っていた「負けず嫌いのスイッチ」を入れた。あえて最も苦手な「衆目に晒される場」であるミスコンへの挑戦を決めたのは、大学生活で何かを成し遂げたいという、自分自身への「宣戦布告」でもあった。

コンテストではエントリーNo.1。常にトップバッターとして会場の空気を決めなければならぬ重責のしかかった。しかし、ここで生き残ったのが中高6年間打ち込んだバントトフリングの経験。その経験が、彼女の土台である「最高の演技を届けたい」というストイックさを生み出した。自身のスピーチを動画で撮り、納得がいくまで数えきれないほど見直す。その

「努力の可視化」こそが、「獲得された自信」へとつながった。

ミスコン活動期間中、彼女はSNSで決して「完璧な姿」だけを見せようとはしなかった。就活への焦りや多忙による疲れなど、等身大の悩みを発信し続けた。

「雨に打たれることを厭わないからこそ、言葉に強さが宿る座右の銘であるドリ！ パートンの名言(※1)を体現するように、弱さを隠さない姿勢が多くの方の共感を呼び、大手事務所「セント・フォース関西」への所属決定。さらに「ミス・ミスターキャンパス関西学院」のファイナリストで投票の末、ミス部門でグランプリを獲得した。

グランプリという最高の栄冠を手にし、彼女は今、次なる目標に向かって突き進んでいる。「忙しのがすごく好き。追い込まれている方が力を発揮できる」と言い切る。かつて震えていた挨拶も、エントリーNo.1としてトップバッターを何度も務めるうちに、今では「かなり慣れてきた」と確かな手応えを掴んでいる。

社会学部で学んだ「他者の視点」を大切に、「常に誰かのために、一生懸命頑張りたい

【用語解説】※1「虹を見たければ、雨を経験しなさい」：If you want the rainbow, you must put up with the rain. 困難(雨)があつてこそ、美しい成果(虹)が得られるという意。

田中葵(たなか・あおい) 2005年(平17)1月4日生まれ、大阪府出身。関西学院大学社会学部在学中。芸能事務所「セントフォース」所属。2025年「ミスキャンパス関西学院」グランプリ。2026年には全国のミ



田中葵さん＝本人提供



スキャンパスの頂点を決める「MISS OF MISS CAMPUS QUEEN CONTEST」でグランプリを受賞した。特技はバントトフリングや筋力トレーニング。165センチA型。